釧路新聞　平成20年(2008年)5月27日（火曜日）

人生の第2幕準備を〝大学〟で

立教大 セカンドステージ大学開校

シニア層、生き方考える

「セカンドステージ大学」の受講生に人気の立花隆さんによる「自分史」授業　東京都豊島区の立教大学

シニア層向けにカリキュラムを組んだ、立教大学の「セカンドステージ大学」が四月に開校した。定年後、仕事で培ったキャリアをさらに磨く生涯学習の場として注目されている。

シニア向けの大学公開講座は数回程度が一般的で、テーマも教養的なものや趣味的なものがほとんど。同大のセカンドステージ大学は、高卒レベルの学力のある五十歳以上を対象とし、超高齢化社会論などの必修科目と、人生を考える自分史などの選択科目から計最低十八単位を一年間かけて取得する。全員がゼミに所属し、修了報告書（論文）も提出する本格的な内容だ。費用は登録料と受講料の計三十三万円。

首都圏を中心に百七十人が受験。筆記試験はなく、エッセーと面接で九十六人の受講生が選抜された。最高齢は八十五歳。退職者が多いが、現役市会議員や会社役員もいて多彩な顔触れだ。

カリキュラムは、自分史や健康長寿などをテーマとする「エイジング社会の教養」、ボランティアや民間非営利団体（NPO）などを学ぶ「コミュニティーデザインとビジネス」、社会老年学入門などの「セカンドステージ設計」の3系統。

立教大大学院特任教授を務める評論家の立花隆さんは、選択科目の一つ「現代史の中の自分史」を担当。それぞれの人生を振り返り、今後の生き方を考えるのが課題だ。最終的に受講生は手作りの自分史を完成させる。

自分史年表の提出を受けた後、教壇に立った立花さんは「朝の五時まで読んでいた。面白いという以上に歴史的に貴重。興味深かった」などと全体を評価。その後、受講生にそれぞれコメントしたが、記念写真を添えてアルバム風に仕立てた年表もあって笑いが漏れる場面も。受講生は九十分間、立花さんの講義に聞き入った。

東京都北区の川島京子さん(六〇)は四十二年間勤めた会社を退職したのを機に受講生に。川島さんは「これから先の生き方を学べるので参加した。修了後も勉強を続けたい」と語った。埼玉県朝霞市の会社顧問高橋雅治さん(同)は「会社で担当してきた広報を学問として研究したい。六十歳は通過点」と話す。受講生はみな意欲的だ。

立教大の笠原清志副総長は「受講生に授業以外でも活動してもらい、帰属意識や仲間意識ができるよう配慮している。今後増えるシニアの居場所を作るための一つの社会事業」と意義を訴える。来年は募集人数を増やすことにしている。